

第2回

グローバルワークキャンプ in ASO

報告書



100人が100人で互いに学び、教え合い、成長する。



開催期間:2014年(平成26年) 8月19日(火)~8月22日(金)

実施会場:国立阿蘇青少年交流の家

主催団体:一般財団法人熊本市国際交流振興事業団

目次

目的・概略	1p	第1分科会：「食」	8p
スケジュール	2p	第2分科会：「フェアトレード」	9p
基調講演	3p	第3分科会：「ジェンダー」	10p
アイスブレイク	4p	第4分科会：「ライフスタイル」	11p
キャンドルサービス ワールドステージ	5p	第5分科会：「教育」	12p
ユメノトビラ	6p	実行委員会より	13p
全体報告会 白川水源観光	7p	アンケート結果	14p

目的・概略

・目的

～グローバル社会における人と人をつなぐ国際交流と若い世代の人材育成～
グローバル化、新興国（特にアジア）の成長等、世界全体の社会構造が大きく変化する中で、アジアを中心に未来を担う若い世代が集い、交流を図りながら、共生社会を構築するための自己の存在認識と可能性を発見する。

・概略

【期 間】2014年（平成26年）8月19日（火）－22日（金）3泊4日

【会 場】国立阿蘇青少年交流の家（熊本県阿蘇市一の宮町宮地 6029-1）

【参加者】80名

内訳：日本人大学生50名、留学生（日本在住）9名、海外の大学生21名（6カ国、1地域）
留学生の数と国籍：9名（バングラデシュ人民共和国6名、インド2名、パプアニューギニア1名）
海外の大学生の数と国籍：21名（大韓民国12名、インドネシア共和国4名、台湾3名、
ラオス人民民主共和国2名）

【主催】一般財団法人熊本市国際交流振興事業団

【助成団体】平和中島財団

スケジュール

8月19日(火) 初日

- 8:00 大分(別府駅前) 出発
- 9:00 福岡(博多駅前) 出発
- 10:00 熊本市国際交流会館 出発
(3ヶ所より貸切バスで出発)
- 11:30 国立阿蘇青少年交流の家 到着
- 12:00 昼食
- 13:00 開会式・開会宣言
基調講演
- 15:00 アイスブレイク
- 17:30 タベの集い
- 17:45 夕食・入浴
- 19:00 キャンドルサービス
- 22:30 就寝

8月20日(水) 2日目

- 6:00 起床・清掃
- 6:45 朝の集い
- 7:00 朝食
- 9:00 分科会活動①
- 17:30 タベの集い
- 17:45 夕食・入浴
- 19:00 ワールドステージ
- 22:30 就寝



8月21日(木) 3日目

- 6:00 起床・清掃
- 6:45 朝の集い
- 7:00 朝食
- 9:00 分科会活動②
- 17:30 タベの集い
- 17:45 夕食・入浴
- 19:00 コメノトピア
- 22:30 就寝



8月22日(金) 最終日

- 6:00 起床・清掃
- 6:45 朝の集い
- 7:00 朝食
- 9:00 全体報告会
- 11:00 閉会式・閉会宣言
- 11:30 昼食
- 12:30 国立阿蘇青少年交流の家 出発
白川水源観光
- 15:00 観光地出発
- 16:30 熊本市国際交流会館 到着・解散
- 18:00 大分・福岡 到着・解散



第2回グローバルワークキャンプ in ASO を開催するにあたり、開会式後、長岡市国際交流センター「地球広場」センター長の羽賀友信先生より参加者へ向けて基調講演がありました。

まず、世界には地雷原と隣り合わせの生活をしている人や、今も戦争で苦しんでいる人たちがいるという話がありました。家の隣に地雷原、学校に行く通学路の近くにも地雷があるかもしれない。常にそのことを考えながら生きていかなければならない。地域の学校では、最初に地雷の見分け方、道の歩き方を学習します。まさに生き抜くことを学ぶことから始まります。そこでは大切なことですが、ある意味悲しいことです。羽賀先生が見せてくださった写真の中で小さな男の子が自分よりもっとちいさな子を抱えている写真がありました。カンボジアの国境線で出会った子どもで、その男の子のおしりの骨はむき出しでした。両親を目の前で亡くし弟を守らなくてはなりません。まだ体も小さく普通なら親や大人に守ってもらう存在なのに戦場では関係ないのです。また、日本の夏の風物詩である花火は、戦場下で暮らす子ども達にとっては、爆弾の記憶と交差し恐怖をフラッシュバックさせます。異なる視点で見ることで色々なことが見えてきます。その違いや見えてくるものや違いを知り受け入れることが大切です。



そして、グローバル人材の資質として、「ファシリテーション能力」の大切さについてお話がありました。まずファシリテーターとは、「対話し質問して相手の意見などを導く促進者」のことです。これには、その場に適する対応力、感じる力、行動する力が必要とされ、そしてその人自身の経験も必要とされます。つまり、様々なことに挑戦し経験することの重要性から、今この場にいることはすごく良い一歩だとおっしゃってくださいました。

また、「肌の色の違いが見えているうちは、人を人として見ていない。どんなに仲良くなった友達でも、白人だから…とか黒人アジア人だからという考えをもっているうちは、本当にその人を知ったとは言えない、自分とは違う外国人だと思っている。」とのことでした。普段話しているとき色が見えなくなり、その人が他の人といのを見て「そうか、彼は…だった！」と思うけれど1対1で話している時はその人自身でしかないので。相手を見る目を変え、固定概念を無くすことは大切だと分かりました。

これらの言葉を胸にしっかり受け止め、その後の3泊4日のプログラムを有意義に過ごすことができました。



アイスブレイク

(九州大学 1年 横田恵梨)

1日目の基調講演後にアイスブレイクを行いました。まず初めに参加者全体で、次に分科会ごとに分かれて行うという2段階構成で行いました。

最初に行った参加者全体で行うアイスブレイクでは、2人組を作って行うゲームから始まり、じゃんけん列車やパスデーチェーンなどを通して段々と交流の輪が広まるという仕組みになっていました。2人組でのゲームでは、1対1で話すことにより参加者が抱いていた緊張感を崩すことができたと思います。



また、じゃんけん列車の後に参加者全員で円をつくって行ったハイタッチでは一体感を得ることができました。次に分科会に分かれて行ったアイスブレイクでは、分科会ごとに1つの振り付けを考える創作ダンスを行いました。考えた創作ダンスは夜に行うキャンプファイヤーで参加者全員に向けて披露するという内容を伝えていたため、どの分科会もダンスの出来はしっかりとしたものでした。

アイスブレイク中の参加者の雰囲気を見てみると、いたるところで笑顔が見られ、緊張がほぐれみんな楽しんでいるようでした。全体で行ったアイスブレイクでは参加者同士が交流できる絶好の機会となり、分科会ごとに行ったアイスブレイクでは、これからはじまる分科会活動で誰もが自分の意見を素直に言えるような暖かい分科会の雰囲気作りが出来ました。アイスブレイクを通して参加者同士が打ち解け合う機会、個人個人の友達の輪をグッと広げる機会を与えることができたと思います。



キャンドルサービス

(日本文理大学 3年 櫻田聖人)

1日目アイスブレイクの集大成であるキャンドルサービス。多くの人、まわりは初対面の人ばかりです。2日目からの活動で参加者のみなさんの心の壁が少しでもなくなるようにこの場を設けました。急な夕立のため野外のキャンプファイヤーから室内のキャンドルサービスに変更しました。実行委員は焦りでバタバタ…。参加者の気分もぐんと落ちると思いきや、プログラムが始まるとかなりの盛り上がりを見せていました。恒例の火の神の登場から、2人の司会で進行していきました。大きな歌、ティーヤゲーム、宇宙人ゲーム、いくつかのミニゲームをした後、事前に分科会ごとに練習していた創作ダンスを披露しま



した。

分科会全員で1つの創作物を作り上げ、全員で披露できたことは参加者の中によい絆が芽生えたと思います。そしてお待ちかねのフォークダンスでは男性から女性を誘うことができず、女性のほうから男性を誘ってペアを組んでいました。さすが女性は強いですね。そして最後は全員で「WAになって踊ろう」を合唱し、終わりを迎えました。

国籍、人種、言語、文化などの垣根を超えて様々な人達が混在していたからこそ、普段のキャンプファイヤーでは味わえない感覚、雰囲気味わうことができたのだと思います。キャンドルを囲み、全員で同じクリエイションをすることで一体感ができました。グローバルワークキャンプのスタートにふさわしいプログラムになったのではないのでしょうか。

ワールドステージ

(日本文理大学 3年 宇都真太郎)

民族衣装を持参した参加者達から「是非自分たちの文化の紹介をしたい!」という声が多々あった昨年のグローバルワークキャブ。「世界中から集まる参加者のアイデンティティをもっと表現する場が必要なのではないか?」「参加者から学び合うテーマに基づいた企画を作れないだろうか?」。昨年の反省から知恵を絞り、このワールドステージは生まれました。有志メンバーのダンス披露に始まり、参加者のテンションは一気にヒートアップ! 自国の民族衣装や用意された様々な国の民族衣装に身を包んだ参加者たちの個性で、会場は溢れかえりました。嬉しそうに自国の衣装や文化を紹介する参加者たちの表情はとて誇らしげで、インドネシアからの参加者は伝統舞踊のサマングスまで披露してくれました。私自身も浴衣や甚平の紹介では、とて誇らしく嬉しい気持ちになりました。即興でダンスを披露してくれ

る参加者まで登場し、会場は大いに盛り上がりました。

最後に熊本の火の国まつりの「サンバおてもやん」を参加者全員で踊り、ステージは終了しました。それぞれの国の紹介は時間的制限があったにもかかわらず、最後までお互いの文化を楽しみ、時を偲んで写真を撮っている参加者の様子はとても印象的でした。

「100人の参加者が教え合い、学び合い、成長する」というグローバルワークキャンプの目的にふさわしく素晴らしいプログラムになったのではないのでしょうか。



3泊4日の日程で行われたグローバルワークキャンプ。アイスブレイクや様々な企画、分科会活動を通して、日を追うごとにみんなそれぞれがお互いを知り、仲良くなることができました。この三日目の夜はその仲間で夢について考える時間でした。

第一部は実際に社会で活躍している講師の先生方をお呼びしてパネルディスカッションを行いました。日本文理大学人間力育成センター副センター長の高見大介氏にコーディネーターをお願いし、パネリストには重光産業取締役広報室長の重光悦枝氏、株式会社タウンキッチン執行役員の西山佳孝氏をお呼びし、本グローバルワークキャンプ第1回、第2回実行委員長の内尾晶子氏が加わったパネルディスカッションでは、3つのキーワード「ターニングポイント」、「ユウキ」、「ユメ」で話し合われました。重光氏の自身の入院、渡米、父の急病という3つのターニングポイントの話のなかで、壮絶な人生の中でも自分らしさを忘れずひとつひとつピンチをくぐり抜けたことを聞き、どんなときでも慌てず俯瞰して物事を見ることの大切さを感じました。また、大学をやめてNPOや会社を立ち上げた西山氏のユウキの源は「無為自然」という老子の言葉でした。何もやらない人生より何かやる人生を選択した西山氏もまた、あるがままの自分でなすべきことをなしてきたそうです。パネリストの中で唯一の大学生である内尾氏のユメは「ビッグな人間」でした。世界で活躍する人間になって、またこのグローバルワークキャンプに講師やオブザーバーとして戻ってくることを目標だそうです。最後に高見氏から「他事争論」という言葉をいただきました。福沢諭吉が造ったといわれるこの言葉は議論することの尊さを訴えており、仲間と共に議論することは「新しいものへ進むことの第一歩となる」ことだそうです。この第1部を通して、どんなピンチの時でも自分らしさを忘れずに仲間と一緒に自分が思う道を進んでいくことが重要である、ということ学びました。

第2部は語り合いの時間とし、講師の先生方と個人的に話せるグループや参加者同士で夢を語り合うことができるスタイルで、第一部で聞いた話をもとに語り合いました。それぞれのグループで話が盛り上がっていて、皆終了時間になってもその場にとどまろうとしていました。この3日目の夜ではグローバルワークキャンプに集った大学生が夢を大きく膨らませ、夢への一步を踏み出すことのできる場になったと思います。



全体報告会

(明治大学 1年 福永健人)

最終日の4日目の午前中、大研修室にて分科会を通して学んだことの発表を行いました。形式は回遊型ポスターセッション方式をとり、自分たちが2日間の分科会活動を通して学んだ知識や考えた意見などについて他の分科会のメンバーに発表しました。日本人大学生と外国人大学生が混在する形での報告会だったため発表者達は日本語や英語、韓国語など様々な言語を用いながら自分の分科会について語りました。聞き手も発表者に意見や質問をしたり、自分の国や文化を説明したり…と熱心に話に耳を傾けていました。



グローバルワークキャンプ自体は4日間という短い期間で、更に分科会活動に関しては2日間しか時間が無いというあっという間ではありましたが、単なる「知識」だけでなく、その知識をいかにして活用すれば良いのか、どのようにすれば他者にきちんと伝えることができるだろうかといった本当の意味での「コミュニケーション力」を身に付けることができたのではないかと思います。学校では学べない、日常生活では気づかない、そのような体験をして新しい友達と、そして新しい自分に1人1人が出会えた時間でした。



白川水源観光

(九州大学 1年 永田理子)

グローバルワークキャンプ最終日には、白川水源へ行きました。直前まで大雨で天気心配されていましたが、皆さんの思いが通じたのか、観光にはもってこいの晴天となりました。白川水源は熊本県中北部を流れる一級河川の白川の水源で、環境省により、名水百選に指定されています。水源の水は透き通っておりとてもきれいで、冷たく、夏に訪れるにはもってこいの観光地でした。

水源の水をくんでかえったり、名産の水まんじゅうや、わらび餅を食べたり、川でびしょびしょに濡れながら遊ぶなど、終始笑顔が絶えず最後にとっても楽しい思い出を作ることができました。



第1分科会【食】

(鳥取大学2年 岩木陽平)

グローバル化した現代、多様な文化・価値観を持った人たちがお互いの国を行き来しています。そんな時、食事についても様々な問題が起こることでしょう。そこで、私たち第1分科会は「食」をテーマに、そういう「考え方・文化の違い」を知り、「もっと食の環境をより良くすること」について2日間学び、考え、話し合いました。

分科会1日目では、まず南阿蘇にある「しゃえんば食堂」という郷土の味の継承をコンセプトにした食堂へ行き、日本の食を味わいました。しゃえんば食堂の代表者である、写真家の長野良市氏や、堂守※である村上建徳氏のお話を聞きながら「煮しめ」などの野菜本来の味を味わうことのできる料理を食べ、お盆2ついっぱい置かれた料理は見た目にも楽しむことができました。

食事をした後は各テーブルで料理を食べてみての感想や、そこから転じて色んな食にまつわる話をしてもらいました。そこでは今回どの料理が美味しかったか、これまで今回のような料理を食べたことがあったか、自分の国の料理はどうかなどについて話して合ってもらいました。1日目を通して、食には様々な「あり方」があり、その考え方は個人や国、文化によって多様であることを学ぶことができました。



2日目の午前中には熊本市在住のイスラム教徒である本田由希氏をお呼びし、イスラムの食について学びました。その中で、1日目に学んだ食の多様性についてさらに深く学ぶことができました。ハラールミートというイスラム教徒が食することが許された特別な手順で処理をされた肉が近所の業務用スーパーでも取り扱っているという話は驚きました。



午後には分科会の学びの総まとめとして、2日間で学んだことを元に、グローバル化した世の中に対応できる新しい食の形を「問題、解決策、提案先」という組み立てで班ごとに考えてまとめてもらいました。班ごとに、飲食店の料理の内容や、そのシステムについて個性的なアイデアが出ていて、非常によいまとめとなりました。

食は人間にとって重要なテーマです。そんな食には様々な考え方があります。国や住む地域の風土食、個人の趣味趣向による食べ物の好き嫌いなどがあります。一方、宗教などの信仰やアレルギーなどの健康の面での食の制限もあります。そんな考え方を知り、理解していくことで新しい世界のあり方が見えてくるのではないのでしょうか。



※堂守…堂の番人のこと。食堂の全体の管理をしている人のことでメニューなどを決める。

第2分科会【フェアトレード】

(熊本大学3年 大和賢佑)

この分科会は、昨年度の「フェアトレードを知ろう」という入門的なコンセプトから、今年は「みんなで一緒にフェアトレードを考える」というアクセサリーの商品開発という具体性のある内容です。

分科会のはじめは、仲良くなろうということで椅子取りゲームと何でもバスケットというゲームをしました。

椅子取りゲームは回を増すごとにだんだんと白熱していき、とても盛り上がっていました。また何でもバスケットでは参加者がそれぞれどのような人物であるかが分かりいっそう仲良くなることができました。ここで仲良くなることができたので、その後の活動がとてもスムーズに行うことが出来たと思います。

分科会の主な内容は、講話、貿易ゲーム、試作品製作、インタビューによるマーケティングです。

講師として来ていただいた、フェアトレードシティックまもと推進委員会の明石祥子さんと境教典さん、また日本フェアトレード委員会の清田和之さんと清田朋子さんからフェアトレードの現状や商品開発におけるマーケティング、啓発活動などについて講話していただきました。そして、実際に公平な貿易を参加者に感じてもらうために格差設定をした貿易ゲームをしました。貿易ゲームでは、参加者は不平等さを感じながらも試行錯誤して目標金額を達成しようと他のチームと交渉したり、黙々と作業を続けたりと頑張っていました。ゲームを通して、貿易には資源があっても技術がないと生産できない、逆に技術だけあっても資源がないと生産することができないことを知りました。活動の途中でコーヒブレイクの時間を作り、分科会でフェアトレードのコーヒーや紅茶、ドライフルーツなどを楽しみました。参加者からは、「このコーヒー、美味しいね。」、「なんでこのコーヒーが広がらないのだろう。」とフェアトレードにもっと興味を持ってもらうことができました。

コーヒブレイクの後、フェアトレード商品のウッドビーズや麻のひもを使って、班に別れて試作品を作ってもらいました。そして作った試作品を、3日目の阿蘇神社の門前町でのインタビュー調査の際に、商店街に持っていき、そこで実際に物を売っているお店の方々に意見をもらい再度、考えをまとめるという実践型ワークショップを行いました。自分が作った試作品が売り物になるのかドキドキしながらも、とても楽しそうにインタビューをしていました。

商品開発という具体的な目的のある企画だったので、参加者には座学だけでは学べないマーケティング調査やより深いフェアトレードを知ってもらえたと思います。



第3分科会【ジェンダー】

(明治学院大学2年 今井泰輔)

本分科会は、「ジェンダー」というテーマでおこないました。ジェンダーというテーマに決めた理由は、この分科会の準備段階で、ナイジェリアの女子学生が拉致され、売り飛ばされているといったようなニュースを耳にし、なぜ女性だけなのか？どうしたら男女平等の世界になるのか？と疑問に思ったためです。しかし同時に“女性専用車両”や“レディース割引”といった、ただ女性を優遇するだけの男女平等ではなく、男性視点の男女平等があっても良いのではないかとも思い、本当の男女平等とはなにかについて考えたい、という思いも込めてこの分科会を作りました。

以上の理由から、今回は、「男女平等」「自分らしさ」という2つのことに焦点を当てて話し合いをしました。なぜ「自分らしさ」がここで出てくるのかというと、男女平等とは、結局のところ「どのように、自分の持っているものを活かしていけるのか？」「自分をありのままに生かせる社会とはなにか？」ということを考えることにつながるのではないかと思ったからです。

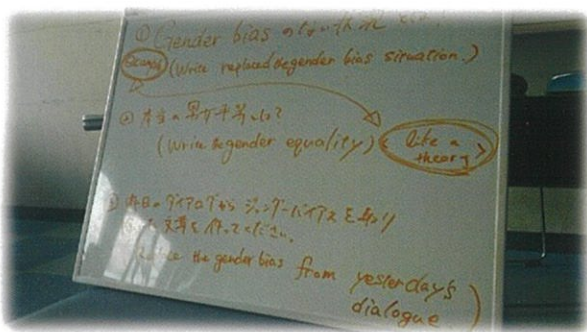
分科会初日は、アイスブレイク、映画鑑賞、話し合いというスケジュールで行いました。映画鑑賞はイギリス映画の「リトルダンサー」を鑑賞しました。主人公の少年は小さい頃ボクシングを習っていましたが、その教室の隣で行われていたバレエ教室に興味を持ち、最後にはボクシングをやめ、バレエの世界へと踏み込んでいくという話を描いたものです。その後お昼休憩をはさみ、「話し合い」に入りました。講師の野田恭子先生からジェンダー、男女平等についての知識、マイノリティー等についてのお話をいただきながら班ごとに意見を出し合いました。



2日目は阿蘇神社を訪れ、宗教におけるジェンダーについて少し触れたあと、街歩きをしながら日常の中の男女平等を考えました。最後は、報告会に向けてディスカッションを行いました。ディスカッションの時間は充分とは言えませんが、参加者一人一人が、この問題に関し「家事や仕事を協力しながら取り組むべき」「自分のしたいことを性別等の理由でできないなんておかしい」、などと意見を出し合い、他者の意見を聞きながら話し合っていました。

この分科会が「ジェンダー」について、参加者が、また私たちが考える、一つのきっかけとなり、今後の活動等に活かせるといいなと願っています。

最後になりましたが、この分科会に関わってくださった皆さん、そしてこのグローバルワークキャンプに関わってくださった皆さん！ありがとうございました！



第4分科会【ライフスタイル】

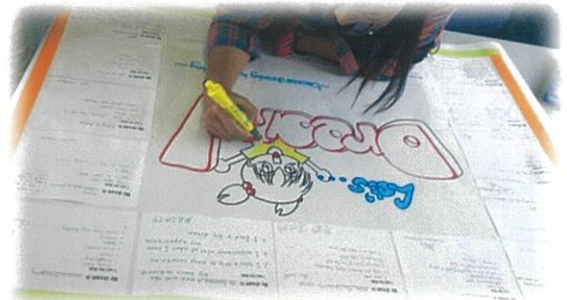
(日本文理大学2年 川口顕)

本分科会は、「ライフスタイル」をテーマに各国の常識や価値観など日々の生活の中から見えてくるものをヒントに参加者1人1人自らの現在の生活を見直し、今後の生活を充実したものにしていける事を目的に行いました。分科会1日目の最初には分科会内で話が弾むように初対面の参加者同士の壁を取り除くようにアイスブレイクを行いました。また、今後のワークのためのアイスブレイクのゲームを利用してグループ分けを行いました。アイスブレイクの後はインドネシアの学生によるインドネシアの生活や風習を動画やプレゼンソフトを用いて発表していただき、その後参加者自身の今の生活スケジュールをワークシートで振り返ってもらいグループ内で自分の今の生活を発表してもらいました。その発表を受けて自分の理想の1日のスケジュールを組んでもらい再びグループ内で発表してもらいました。またグループ内の発表を受けて他の参加者の意見を聞いて自分の理想のスケジュールの変更をしてもらい、ワークの最後には本分科会の参加者の前で各グループ代表を一人ずつ選出し発表を行ってもらいました。

分科会1日目の午後にはフィールドワークで、「擬似カップルデート」と題して阿蘇神社やその周辺の町の散策を行いました。しかしこのデートにいくつか条件を設けました。1つはデートと題しているので男女1人ずつでメンバーを組みさらに異なる国籍同士という事。2つ目はカップルになった者同士それぞれ相手に対して自分なりのおもてなしを行うことという条件を設けました。フィールドワークを30分程度行ない、ワーク終了後に男女に分かれてもらい自分がやったおもてなしとやってもらった事を話し合いその後カップルごとに自分がやったおもてなしと相手がやったと思われるおもてなしをみんなの前でお互い発表してもらいました。分科会1日目のまとめとして異性に求めるものや理想の自分を各グループフリートーク形式で話してもらい分科会1日目を終了しました。

分科会2日目の午前中は自分が今生きていくために必要な事を1日目にグループに再び分かれてもらいブレインストーミングやKJ法を使ってまとめてもらいました。午後からは自分の理想の人生プランを1年後には何をしている、その為にやるべきことを書いてもらいました。その後、分科会のまとめとして、1つは自分の夢に向かってこういったことをするという宣言書を1人1人書いてもらい、その後、今後の理想の社会を築いていくためにできることを参加者全員で話してもらい最終的に自分たち個人でできるもの、国や団体といった大きい組織で動いてできるもの、そして自分たちの気持ち次第で変えられるものの3つに分けてもらい国際社会3カ条として分科会のまとめを行いました。

2日間という期間の参加者1人1人が自分の今の生活を振り返りつつ今後自分の生活を充実するにあたって必要なものや理想の生活を考えつつ初めて出会ったメンバーで組まれたグループ内でも真剣に話し合いを重ねて学生同士でも異なる価値観や考えを知る機会になりました。



第5分科会【教育】

(福岡女子大学1年 木下めい)

第5分科会「教育」ではミレニアム開発目標の項目で一番解決まで遠いといわれている初等教育の完全普及の達成に着目し、途上国の教育について参加者とともに考えを深めていきました。それと同時にこれからNPO・NGO等で活動をする際に必要となるプランニングスキルを身につけるための練習をしていきました。

分科会初日は鍋が滝を訪れ、大自然に触れ、大きな滝の強大なパワーを体感してきました。その後、プランニングスキルを身につけるための練習として3~4人のグループに分かれて自分たちが先生で小学生を社会科見学で鍋が滝に連れて行くなら、という仮定で事前準備から事後の振り返りまでの計画を立てる企画をしました。子どもたちに何を



感じさせ、何を学ばせるのか、それに伴うメリット、デメリットを考え、最善のプランを組み立てていきました。プランニングの骨組みに沿って各班自分たちのプランを立てました。特に実際に行って各々が感じたことを小学生の学びに繋げている班が多かった様でした。その後、アフリカのギニアビサウ共和国で20年以上活動をされている馬場菊代氏と南米の国々で30年以上活動をされていた丸田隆弘氏を講師にむかえ、国の様子や、教育の現状について経験を踏まえて興味深いお話をいただきました。

翌日には途上国の教育問題をグループに分かれて考えました。講師の先生方にインターネットでは得ることのできない現地の生の状況を聞きながら考えを深めていきました。そして、世界で課題とされている初等教育の問題を解決するには自分たちは何ができるのか、先進国は何ができるのか、日本人だけでなく、留学生からの視点も交えながら考えました。私の班ではいまだ途上国と呼ばれる国から来た留学生の過去の体験談を聞き、給食費の無償化の案が出ました。他にも途上国の現状を伝えるテレビ番組を作るといった意見や、性教育の問題について話し合うグループもありました。このキャンプのテーマでもある参加者同士での学び合いの時間を過ごしました。



最終日の報告会では政策提言と題し、2日間で学び考えてきたことを発表しました。

2日間という短い時間ではありましたが、世界の教育問題について真剣に考え、また、日本人だけではない同世代の学生と意見交換するいい機会になったように思います。



本キャンプに参加していただきました皆様、本当にありがとうございました。本キャンプには国も性別もそれぞれ違う大学生 80 名が世界から集います。自分とは異なるアイデンティティを持つ人と交流し、議論し、互いに刺激を受け合える存在になることを目標に今年は「100 人が 100 人から学びあい、教えあい、そして成長する」というテーマを掲げ、準備を進めてまいりました。

キャンプ初日は緊張した面持ちで、外国人グループと日本人グループに分かれていた参加者も日を追うごとに混合のグループになり、時には英語、時には日本語、時には韓国語等、多様な言葉で楽しそうに話している様子が見受けられました。また、2日間かけて行った分科会活動では実行委員会が考える世界の問題「食」「フェアトレード」「ジェンダー」「ライフスタイル」「教育」に分かれ、参加者同士で考えました。言語の壁はありましたが、通訳の皆様のご協力と参加者同士で分かろうとする気持ちがあったため、最終的には有意義な時間になったように思います。

さらに、最終日の閉会式で行ったアンケートでは参加者から「人種や肌の色、宗教、違うことは多いが、わたしたちは1つだ」「日本の視点だけで考えていた問題は、世界の問題だった。視野が広がった。」との嬉しい意見も上がりました。私個人も今回のグローバルワークキャンプを通して、今まで自国で解決しようとして行き詰まっている問題が他国の意見が加わることで解決する可能性があるのではないか、と感じました。これからのグローバル社会では自国だけ、自分だけでは通用しない社会になります。今後もグローバルワークキャンプが「互いに学びあう力」「互いを思い合う力」を育む場になることを望みます。

最後になりましたが、このキャンプに関わっていただきました協力者・協力団体の皆様、そして、私たち実行委員にこのような貴重な経験の機会を与えてくださいました熊本市国際交流振興事業団の皆様にご心から感謝申し上げます。

10年後、BIGになって帰ってきます!!!!



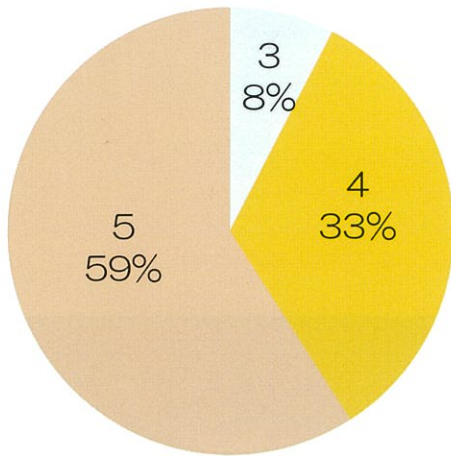
実行委員募集!

第3回グローバルワークキャンプの実行委員を募集中しています!
 会議は月に1度、九州のどこかで観光も含めて行いたいと思っています。
 第2回の際は、熊本、大分、福岡で行いました。遠い方でも Skype で会議に参加することができます!九州から遠い方も大歓迎です!!
 初対面の方ともすぐに仲良くなることができます!
 大変な経験をすることもあるけど、それ以上に楽しい経験ができます!!
 興味のある方は是非、下記のアドレスに連絡をください。お待ちしております☆

E-mail pj-info@kumamoto-if.or.jp

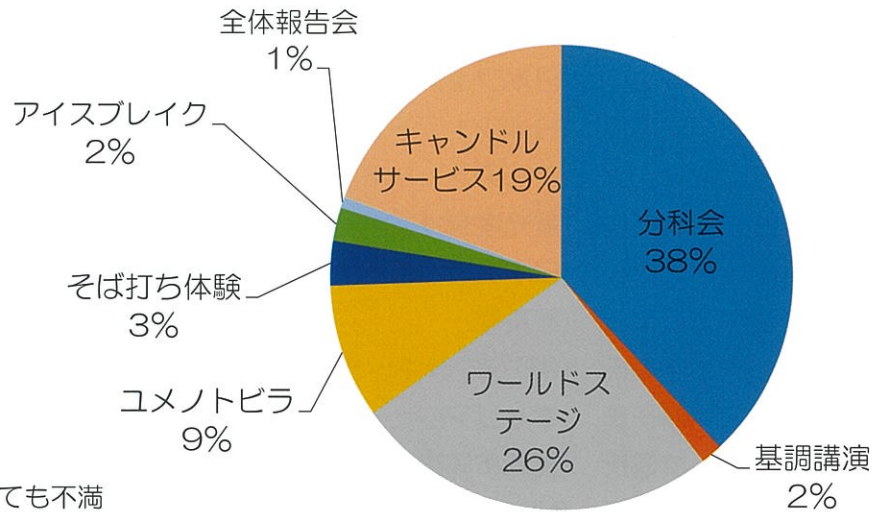


今回のキャンプはどうでしたか？
5段階評価

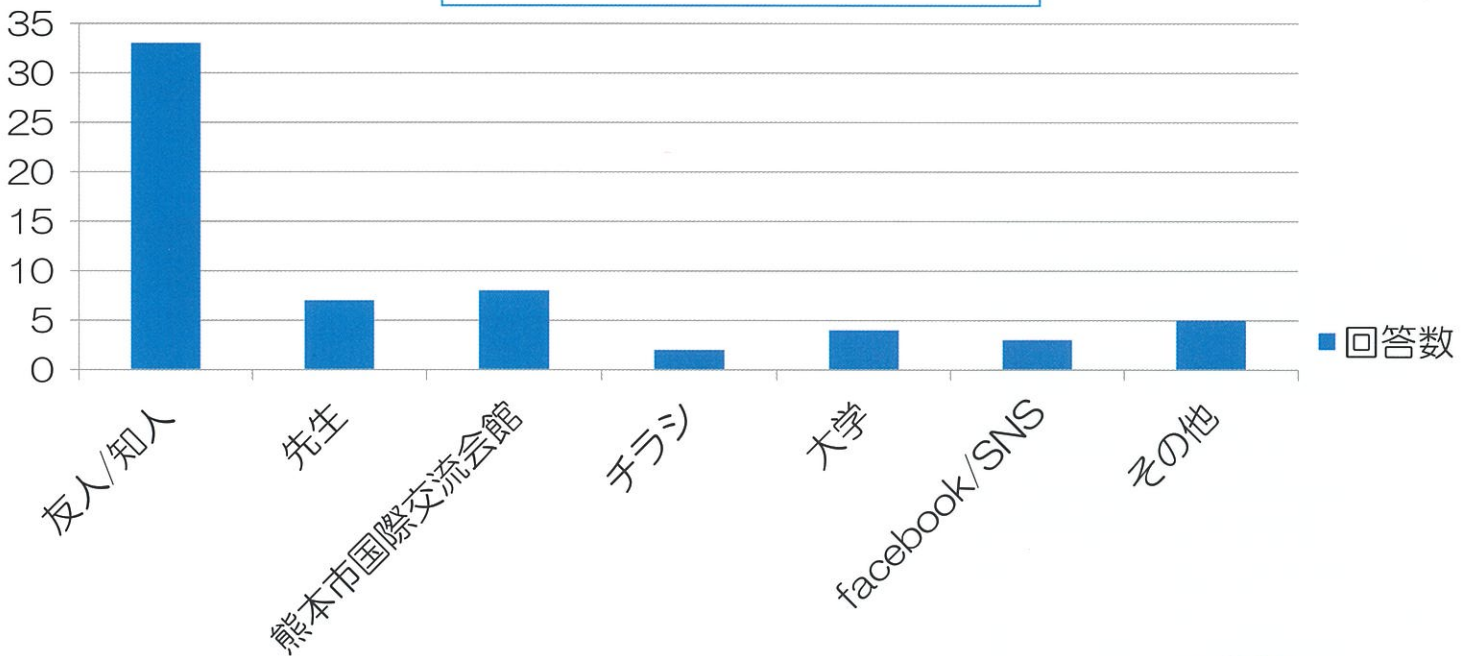


5 とても満足 4 満足 3 普通 2 不満 1 とても不満

特によかった企画は？

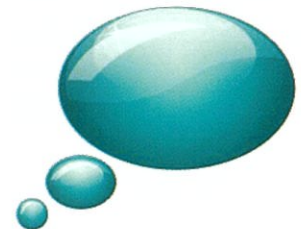


何を通してGWCを知りましたか？



【参加者の声】

- 外国の方と世界の問題について話し合ういい機会だった。
- 分科会で詳しく知らなかった内容を深く知ることができた。
- たくさんの外国の方と交流できてよかった。
- 外国人に対する言語のサポートが少なかった。
- 多くを学べたが、内容の割に時間が少なく疲れた。
- すべてのプログラムを楽しめた！実行委員の人が考えてくれたからだと思う。
- 色々な国の人たちと一緒に国際問題を考える機会はあまりないからすごく大事な時間だった。
- 沢山友達もできたし、色々勉強し、他の国の意見や他の宗教の意見も聞けた。



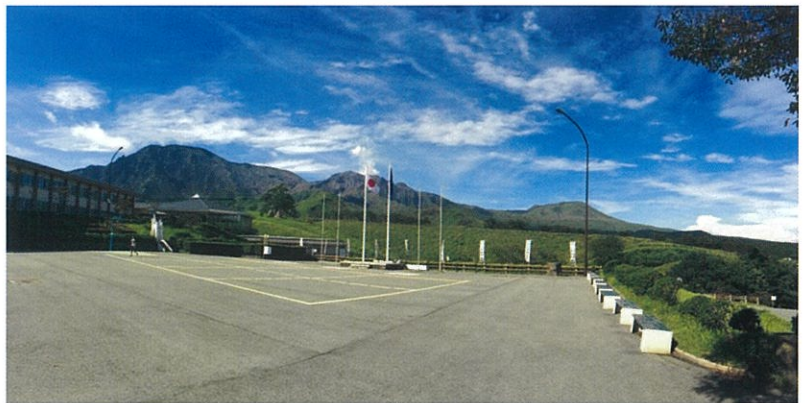
関係者一覧

助成団体(順不同)

- ・ 平和中島財団
- ・ 熊本ユネスコ協会

協力者(五十音順)

- ・ 明石 祥子氏 (フェアトレードシティくまもと推進委員会代表)
- ・ 大賀 哲 氏 (九州大学大学院 法学研究院 政治学部門准教)
- ・ 清田 和之氏 (日本フェアトレード委員会理事長)
- ・ 清田 朋子氏 (日本フェアトレード委員会 事務局)
- ・ 境 教典 氏 (フェアトレードシティくまもと推進委員会理事)
- ・ 重光 悦枝氏 (重光産業株式会社取締役広報室長)
- ・ 高見 大介氏 (日本文理大学 人間力育成センター副センター長)
- ・ 長野 良市氏 (写真家)
- ・ 西山 佳孝氏 ((株)タウンキッチン執行役員)
- ・ 野田 恭子氏 (キャリアウエーブ代表)
- ・ 羽賀 友信氏 (長岡市国際交流センター長)
- ・ 馬場 菊代氏 (NPO 法人エスペランサ代表)
- ・ 本田 由希氏 (ムスリムコミュニティ代表)
- ・ 丸田 隆弘氏 (九州海外協力協会専務理事)
- ・ 村上 健徳氏 (しゃえんば食堂堂守)



協力団体(順不同)

- ・ 日本文理大学
- ・ 立命館アジア太平洋大学
- ・ 熊本留学生交流推進会議
- ・ しゃえんば食堂

実行委員会メンバー

- 内尾 晶子(九州大学)
- 横田 恵梨(九州大学)
- 木下 めい(福岡女子大学)
- 大和 賢佑(熊本大学)
- 野口 一馬(熊本県立大学)
- 中田 ひかり(熊本学園大学)
- 中野 桃子(熊本外語専門学校)
- キム キファン(東南保健大学)
- 黨 翠(熊本大学)
- 岩木 陽平(鳥取大学)
- 永田 理子(九州大学)
- 宇都 真太郎(日本文理大学)
- 櫻田 聖人(日本文理大学)
- 川口 顕(日本文理大学)
- 福永 健人(明治大学)
- 今井 泰輔(明治学院大学)

facebook



私達、実行委員会が運営しているページがあります！

会議の様子や、実行委員の紹介、キャンプの内容等キャンプに関する記事を随時投稿しています。少しでもキャンプに興味を持った方は、このページにアクセスしてください。

今後の実行委員会の活動を温かく見守ってください！ よろしくお願ひします☆

<https://www.facebook.com/globalworkcamp.aso>



【主催】

一般財団法人熊本市国際交流振興事業団

〒860-0806 熊本市中央区花畑町4-18(熊本市国際交流会館)

TEL: 096-359-2121 FAX: 096-359-5783

E-MAIL: pj-info@kumamoto-if.or.jp URL <http://www.kumamoto-if.or.jp/>